



TITLE:

獨逸大銀行と工業の集中運動 - ヤ
イデルスの研究に對する一考察 -

AUTHOR(S):

田杉, 競

CITATION:

田杉, 競. 獨逸大銀行と工業の集中運動 - ヤイデルスの研究に對する一
考察 -. 經濟論叢 1936, 43(3): 412-426

ISSUE DATE:

1936-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130843>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 三 第

卷三十四第

行發日一月九年一十和昭

論 叢

不動産取得税に就きて

法學博士 神戸正雄

金融の實質的及び表見的の緩漫と逼迫

經濟學博士 小島昌太郎

漁業組合制度論

經濟學博士 蜷川虎三

時 論

電氣官營に就て

經濟學博士 作田莊一

家屋税移管問題

經濟學博士 沙見三郎

研 究

ヒルデブラントに於ける國民經濟學の課題

經濟學士 白杉庄一郎

獨逸大銀行と工業の集中運動

經濟學士 田杉 競

講 演

國際資源の再分配問題

文學士 高原 操

說 苑

獨逸國新電力政策に就いて

經濟學士 大塚 一朗

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

獨逸大銀行と工業の集中運動

——ヤイデルスの研究に對する一考察——

田 杉 競

一、序 言

獨逸銀行業の一大特徴とせられた兼營主義は十九世紀後半、獨逸の工業國化と共に注目すべき現象となり、世界大戰迄續いた。之は英國の分業主義（預金銀行主義）と明白なる對照を示し、又銀行の集中と併行したるが故に、多數の學者の研究對象となり、ザットラー¹⁾、アドルフ・ウエーバー²⁾、リーサー³⁾、シユルツェ・ゲファーニッツ⁴⁾等の有名なる著書を生んだ。他方兼營銀行主義は本來工業企業の設定を金融的に援助するものなるが故に、銀行は工業と深き關係を結ぶ。この關係が如何なる程度迄如何なる方向に進むかについてはヤイデルス⁵⁾、ヒルファディング⁶⁾等の研究がある、ヤイデルスの著書は「獨逸大銀行と工業との關係（特に鐵工業を中心として）」と題され彼のベルリーナ・ハンデルスゲゼルシャフトの重役たりし地位によつて得られたる豊富な資料を基礎とし、此の方面において最も詳細なる代表的研究である。

ヤイデルスの研究は彼自身もいふ如く、預金銀行と信用銀行（投機銀行）との何れが一國信用機關

- 1) Sattler, H., Die Effektenbanken, 1890.
- 2) Weber, Ad., Depositenbanken und Spekulationsbanken, 1901.
- 3) Riesser, J., Zur Entwicklungsgeschichte der Deutschen Grossbanken mit besonderer Rücksicht auf die Konzentrationsbestrebungen, 1905.
- 4) Schultz-Gaevernitz, Die deutsche Kreditbank, G. d. S., II. Teil, V. Abt., 1915.

として理想的なりやを問題とせるに非ず、又工業が一般に銀行に如何なる作用を及ぼすかを取扱ふものでもなく、一定の時、一定の處において銀行が工業に如何なる關係をもつかを考察する。⁵⁾ 即ち一八七〇——一九〇五年における獨逸鑛山業・鐵鋼業及び電機工業と獨逸大銀行との關係を考察してゐるのである。

ヤイデルスが得たる結論はその後ヒルファディング等によつて強調され一般化され、その考へ方は甚だ廣く行はれてゐるけれども、かゝる一般化は必ずしも正しいといふ事を得ない。換言すれば銀行の工業に對する作用には或る限界があることを注意しなければならない。ヤイデルスの見たる事實が如何なる經濟事情の下において起つたかといふ點がこの場合看過すべからざる一問題である。從來は、世界大戰後種々なる事情のため兼營銀行主義が獨逸においても次第に不明瞭となりつゝある點が、主として銀行資金の内容に着目して屢々論ぜられた。⁶⁾ 之と反對に主として工業の側における當時の事情を明かにすること、之が小論の目的である。

順序として、先づヤイデルスの所論の大要を述べ、次いで一九〇〇年前後の工業、特に重工業における資本需要と企業集中の發展とを考察する。

二、銀行の態度の變化

ヤイデルスは工業の發展に對して銀行が如何なる作用を及ぼしたかを問題としたのであるが、

5) Jeidels, O., Das Verhältnis der deutschen Grossbanken zur Industrie, 1905.

6) Hilferding, R., Das Finanzkapital, 1910.

7) Hagemann, W., Das Verhältnis der deutschen Grossbanken zur Industrie, 1931, S. 6.

8) Jeidels, a. a. O., S. 13.

9) 田中金司、金本位制と中央銀行政策、443-512頁 楠見一正、島本融共著、獨

彼の所謂工業の發展とは大體、工業の膨脹、就中集中を指してゐる。¹⁾ 問題を分つて、(一)銀行は工業の集中に對して何等かの影響を與へるか、(二)工業の集中に於けるイニシアティヴは銀行にあるか、工業にあるかの二點とする。²⁾

第一の問題について、工業の集中に對して銀行が何等かの援助を與へて之を促進せることは極めて多數の實例を擧げて明かに認めてゐるところである。工業の集中とそれに對する銀行の援助の事實については、この研究は他にその比を見ざる豊富なる資料を以て充ちてゐる。第二の問題について、即ち工業集中のイニシアティヴは工業企業自身にありや銀行にありやについては、解答は必ずしも簡單でない。勿論工業企業における集中が工業自身の考慮に出で、即ち工業自身に存する根據から行はれることには何の不思議もない。けれどもそれ以外に銀行が工業に融資するが故に自己の利益のみから集中を強制するといふ事が屢々あるか、かゝる銀行自身の考慮に出づる集中が假令存するとしても例外的場合ではないか、といふ事が問題となるのである。ヤイデルスに依れば、多くの場合に集中運動のイニシアティヴは工業の側にあり、銀行は背後より之を援助するに過ぎなかつた。唯漸く銀行が積極的となり、追隨的態度を捨て工業との充分なる協働によつて集中が行はれるやうになつたのは一八九〇年以後、特に一九〇〇年以後のことなりとしてゐる。³⁾ 而もそれは此の研究の發表せられたる一九〇五年頃において全體より見て未だ萌芽的なものに過ぎないといふのである。かくの如く彼は銀行の工業集中に對する態度を當時においては決して

逸金融組織論、279-352頁、特に349頁以下。

1) Jeidels, a. a. O., S. I, 181.

2) a. a. O., S. 184.

3) a. a. O., S. 181-184, 103-105, 122-123.

大なるものとせず、極めて控へ目な結論しか下してゐないことは充分注目しに値ひする點である。
かくて一八九〇——一九〇〇年を境として銀行の工業集中に對する政策に第一期と第二期とを分つことを得る。

銀行と工業集中との關係については、第一に、工業獨自の理由から集中が行はれて、銀行は單に之に追隨するか、又は背後より之を促進するに過ぎざる場合がある。第一期における銀行の態度は概ね之であつた。集中は或は生産技術的理由より、或は經濟的理由より、或は人的理由より、行はれ、全く銀行の干涉なくしても行はれた。ハイマンの獨逸鐵工業における混合企業發展に關する研究はかゝる工業獨自の理由による集中について多數の實例を示してゐる。又原料購入關係、人的關係からの結合も屢々その例を見る。一九〇二——〇四年の電機コンツェルンの集中、即ちアルゲマイネ電氣會社(AEG)とウニオン電氣會社との合併、及びジーメンス・ハルスケ會社とシエツカート會社との合併の如きも銀行の力なくして行はれたものであつた。ライン・ウエストフリア石炭シンデケートに對しても最初(第一次、一八九三——一九〇三年)銀行は唯間接的な助力をしたに過ぎない。⁷⁾

第二に、かくの如き銀行の消極的態度と正反對の場合がある。即ち銀行の強き援助の下に集中が行はれる場合であるが、ヤイデルスによれば第一期においては例外であるが、第二期にはその特徴となるに至つたものである。之には例へば、銀行が融資せる企業が金融的窮境に陥り、銀行

- 4) a. a. O., S. 198-202, 236-240, 250.
- 5) Heymann, H. G., Die gemischten Betriebe im deutschen Grosseisengewerbe, 1904.
- 6) Jeidels, a. a. O., S. 242.
- 7) a. a. O., S. 254.

はその融通せる資金を確保するためには、會社の整理、合同等に對して立入つた援助を與へざるを得なかつた場合がある。⁸⁾然しかくの如き銀行の態度は自由意思的でなく、止むを得ざるに出でたものであつた。又他の場合には、銀行が一工業部門の數企業に巨大なる融資をなし、工業企業間の競争による不利益を避るけたために、集中に對して強き關心を持たざるを得なかつたことがある。例へば製鋼業組合 *Stahlwerksverband* 結成の際、之に参加を喜ばなかつたフエニックス會社に對して参加を強制したシャーフハウゼン銀行聯合の態度(一九〇四年)の如き之である。⁹⁾更に進んで、工業と銀行とが緊密なる關係を結び、兩者の協力の下に集中運動が發展した例は獨逸の炭鑛業及び鐵鋼業に於いて見られた。炭鑛業において大なる勢力をもつティツセンとドレスデン銀行との結合關係、ロートリンゲン・ルクセンブルグ地方鐵鋼業に支配的なるシュペーターとシャーフハウゼン銀行聯合(それはライン・ウエストフアリア鐵鋼業にも支配的勢力をもつ)との關係、及びその間に立ちて兩工業家の何れにも親しきステインネスの三群を外にしては、一九〇三年の第二次ライン・ウエストフアリア石炭シンデケートの成立も一九〇四年の製鋼業組合の成立も不可能であつた。¹⁰⁾

銀行が工業の集中に對して放任的態度をとる場合と積極的態度をとる場合の外、銀行が仲介となつて集中を促進することがある。¹¹⁾即ち一銀行が數企業に關係せるため、この銀行を中心として工業企業が相互に接近し、やがて或はカルテル結成に必要な相互の了解を深め、或は縦斷的又は橫斷的の合同が行はれることともなる。かゝる銀行の役割は云ふ迄もなく單に集中に對して僅か

8) a. a. O., S. 203-210.

9) a. a. O., S. 256-258, 147, Weber, Ad., *Depositenbanken und Spekulationsbanken*, S. 81-82

10) a. a. O., S. 262-264.

11) a. a. O., S. 214.

な援助を與へるに止る。

工業に於ける企業集中が工業自身の利害關係によつて出發し、銀行はその大なる收益を期待し得る顧客範圍を擴張せんために之を促進するといふことは一應明らかな事であり、第一期において銀行が集中に對して比較的放任の態度をとつたのは之がためである。然るに第二期に入り、嘗ては例外であつた銀行の積極的態度がむしろ原則的となる徴が見えるといふのである。之は明らかに銀行が工業企業及びその集中に對して強き關心を持つに至つたこと、及び銀行の勢力が強くなつたことを示すものに外ならない。即ち工業集中に對する銀行の干涉の理由及び可能性が形づくられたと言ひ得よう。

三、重工業の資本需要

銀行が工業に多額の資金を融通したときは、云ふ迄もなく銀行はその資金が安全に投資されてゐるや否やにつき絶えず注意しなければならない。又若し不幸にしてその工業企業の營業狀態が悪化したときは、その融通せる資金を失はざらんとする限り、更に充分なる援助を與へて、此の苦境を切り抜けさせることも必要となる。銀行は當座貸越業務(Kontokorrentgeschäft)にせよ、¹⁾證券發行業務にせよ、²⁾又は株式參與にせよ、³⁾兎も角多額の融資をするとき、直接には收益を目的とせることが多いけれども、延いて工業に對して或る程度の干涉を加へることゝなる。しかも

12) a. a. O., S. 182.
1) Jeidels, a. a. O., S. 121-127.
2) a. a. O., S. 127-143.
3) a. a. O., S. 110-121.

その融資が巨額であればあるだけ、又同一工業部門、又は相前後する生産段階の多くの企業に及ぶ程、銀行は集中に對して積極的態度をとらざるを得なくなる。獨逸において銀行が工業企業に對し、殊にその集中に對して積極的協力をするに至つたのはかくの如く或る工業に對して巨額の投資が行はれたからである。

ヤイデルスによれば、一八五〇——七〇年に比して一八七〇年以後における銀行の活動が異る點として、(一)工業企業が大資本になり、従つて企業設立も證券發行も多くなつたこと、(二)大銀行が従前に比し排他的役割を演じ、銀行集中によつて益々工業に對する關係を深くしたこと、(三)銀行の對工業關係が多面的に且深くなつたこと、(四)恐慌の場合にも工業に對する關係を斷たず、寧ろ擴張したことが擧げられる。⁴⁾この傾向はその後益々發展したのである。

次に一八七〇年以後獨逸の工業、しかもその或る部門において如何に資本需要が激増し、銀行が之に融通せざるを得なかつたかを見よう。この勢が一九〇〇年以後特に著しかつたことも次の數字の示す通りである。

獨逸における私人企業の株式會社への轉換は一八八〇——九〇年代に多く、新設せられたる會社をも加へて一九一〇年まで株式會社數及びその資本金の増大は著しいものがあつた。⁵⁾一八八三年には株式會社數一三一、その資本金三十九億マルクであつたが、一八九六年には社數三七一二、その資本金六十八億マルクに上つた。⁶⁾しかもその中でも鑛山業、鐵鋼業及び電機工業はこの

4) a. a. O., S. 105.

5) Sombart, W., Die deutsche Volkswirtschaft im neunzehnten Jahrhundert, 1927, S. 299.

時代において最も顯著な發展を遂げたものであつて、ヤイデルスが彼の研究においてこれら工業を特に取り上げたのも、全くそれらが當時著しい發展をとげたことゝ、技術的、經濟的理由より巨額の資本を必要としたに依る。⁷⁾ 一八七一——一九一〇年に至る間における炭鑛業及び鐵鋼業の發展は次の生産物價額及び株式會社資本金によつて視ふことを得る。⁸⁾

年	石炭		鐵鑛		銑鐵	
	經營數	產額	經營數	產額	經營數	產額
一八七一—七五平均	五六四	三三〇	三九一	一四四	二八	一八二
一八八一—八五平均	四六〇	三八三	八二〇	二七	二四	一七五
一八九一—九五平均	五六七	二二三	六八五	二〇	二五	三九
一九〇〇	三八	九六六	七八	七	一〇八	五二
一九一〇	三八	一、五六	五二	一〇六	九	八〇三
鑛山業及鐵鋼業						
	會社數	資本金	會社數	資本金	會社數	資本金
一九〇一	一四	一、二七三	二五	六三	三六	六七〇
新設	三	四六	三	二二	三九	一六四
一九一〇年における計	一七	一、六三〇	一四	八四	四五	八三四
產額及び資本金は單位百万マルク						

註 產額及び資本金は單位百萬マルク

勿論大銀行は危險分散及び營業範圍の擴大の意味よりして地域的及び工業部門別に見て工業に對する關係が一部に偏せざるやうに努力してゐるけれども、⁹⁾ 猶資本需要の大なる工業に多額の融

6) Riesser, a. a. O., S. 71-72.
 7) Jeidels, a. a. O., S. 7-10, 199, 222.
 8) Sombart, a. a. O., S. 508-509, 501-502.

資を行ふに至つたことは當然である。

かくの如き資本需要の増加の原因は根本的には獨逸國民經濟の發展であるが、その他種々なるものを擧げ得る。鐵鋼業においては技術的理由として、ジーメンズ・マルチン法、トーマス・ギルクライスト法の如き新製鋼法が發明せられ之による新設備がなされたこと、經濟的理由として鑛鑪の大規模化したること、及び餘剩瓦斯利用、連續作業の設備が増加したことが擧げられる。¹⁰⁾

炭鑛業においては新なる炭田が發見され開發された。又カルテルの加盟者として割當量を多く獲得するために設備の擴張に努めたといふ事情もある。一八九五——一九〇〇年の好況が、殊にその時における原料カルテルの價格吊上政策が、設備擴張に拍車をかけたことも見逃し得ない。¹¹⁾

かくの如き工業の資本需要の増大に拘らず、當時獨逸金融組織は之に應ずるだけの充分なる内容をもつてゐるとは言ひ得なかつた。地方小銀行及び私人銀行家はその地方における工業企業と關係してゐたが、工業の集中と共に必要なる資力を持たないため、大銀行に併合せられ、大銀行のみが大工業に融資するやうになつた。¹²⁾而して一般公衆の投資が未だ普及せず、特殊の投資仲介機關もなきために、會社形態への轉換、社債發行、増資、整理、合同についても概ね銀行の援助が必要であつた。いはゞ金融業務については大銀行は全く獨占的地位を持つてゐたのである。勿論金融會社(Finanzierungsgesellschaft)は一九〇〇年前後より少數見ることが得るが電機工業(及び鐵道事業)に限られてゐた。¹³⁾かくの如く工業が資金を得るには、殆ど如何なる方法によつても

9) Jeidels, a. a. O., S. 169-180.

10) Vogelstein, T., Die rheinisch-westfälische Montan- und Eisenindustrie(Schriften des Vereins für Sozialpolitik, Bd. 106: Die Störungen im deutschen Wirtschaftsleben, 1903), S. 80, 小島精一、鐵鋼業發展史論、325-338頁。

11) Vogelstein, a. a. O., S. 87.

12) Jeidels, a. a. O., S. 38-40.

銀行の助力を要するため、銀行の力は當然強いものとなる。一方には一九〇五年頃既に證券發行業務は漸次衰へつゝあつたが、然し當座貸越業務等による經常的關係は益々深くならんとした。¹⁴⁾ 他方一八九九年の高景氣には工業は樂觀的な市場觀察から銀行信用を多く利用せんとする傾向が強かつた。又株式及び社債の發行額はこの頃著しく多かつた。¹⁵⁾

工業企業が世界大戰後の如くに、或は戰爭に基く損害の賠償を受け、¹⁶⁾ 又インフラチオンを利用して債務を軽くし、コンツェルンの發展を行ひ、その結果資金の需要がさほど著しくなく、他方その調達についても銀行の活動より獨立し得るならば、工業は銀行に對してより、強き地位に立ち得る。大企業は(一)長期の資金計畫を立て、¹⁸⁾ (二)利益留保による自己金融を行ひ、更に(三)株式・社債を銀行の援助なくしても發行し得るやうになつたからである。⁹¹⁾ 又工業企業に於ける集中が銀行集中を凌駕して著しき大資本となつたことも亦工業の地位を強化した。勿論銀行の側において、銀行の自己資金が外來資金に比して減少し、又資本が缺乏して外資が多く導入され、かくて銀行が長期の投資に向け得る資金を充分に持たないといふ理由があることは屢々論ぜられた如くである。

要するに信用機關としての大銀行の獨占的地位に對して、工業が急激な發展と之に伴ふ資本需要とを以てのぞむ場合、工業は相對的に弱き地位に立たざるを得ないことは明かである。一九〇〇年前後より銀行はその強き地位によつて工業の集中に對して積極的な協力を示すことが必要となり、且可能となつたのである。

- 13) a. a. O., S. 236; Liefmann, R., Beteiligungs- und Finanzierungsgesellschaften, 1931, S. 507.
14) Jeidels, a. a. O., S. 180.
15) Vogelstein, a. a. O., S. 91-92.
16) Hagemann, a. a. O., S. 91-92.
17) a. a. O., S. 178.
18) a. a. O., S. 58-59.
19) a. a. O., S. 174-176.
20) a. a. O., S. 88, 182.

四、企業集中の發展

銀行が工業企業の集中に對して積極的態度をとるに至つた他の一因はこの頃よりカルテル及び合同が著しく發展し、銀行が之に強き關心を持つに至つたことである。獨逸においては一八七三年以來一八九四年迄の二十一年間大部分は不況の中にあり、この間に企業集中が次第に多くなつたのであつた。その間には好況期もあつたが、一八八八年より九〇年に至るものを除けば何れも極めて微弱なものであつた。一八八八——九〇年の好況は生産擴張に著しき刺激を與へ、之が九〇年以後カルテルの成立を促し、更に一八九五——一九〇〇年の大好況、殊にその末期における著しい生産擴張と一九〇一年の恐慌とは獨逸におけるカルテル發達史上一つの時期を劃するに至らしめた¹⁾。又これら好況期において原料工業カルテルの價格吊上政策が單純企業を壓迫し、その頃より上下兩生産段階の結合による混合企業の發展が著しくなつた。かくして一八七三年以來不況の中に徐々に進みつゝあつた企業集中が、一八九〇年頃より極めて速かなテンポとなり、國民經濟上全く看過する能はざる現象にまで發展したのである。學界においても一八八三年クラインヴェヒター²⁾がカルテルを經濟學において始めて問題として以來、シェーンランク³⁾、リーフマン⁴⁾、ポール⁵⁾等多くの學者の注目を惹くに至つた。工業自身が収益狀態を良化せんための集中ではあるが、之に對して銀行が深き關心を持つに至つたことは何の不思議もない。

1) Liefmann, R., Kartelle, Konzerne und Trusts, 1930, S. 29; Vogelstein, T., Die Finanzielle Organisation der kapitalistischen Industrie und die Monopolbildungen, 1923 (G. d. S. VI. Abt.), S. 419-420.

2) Kleinwächter, F., Die Kartelle, 1883.

3) Schönlanck, B., Die Kartelle, 1890.

4) Liefmann, R., Die Unternehmerverbände, 1897.

獨逸における當時のカルテルの數は、リーフマンによれば一八六五年に四、一八七五年に八、一八八五年に九〇、一八九〇年に二一〇、一八九六年に二六〇を算へ、一九〇五年に發表せられたる政府のカルテル調査書によれば同年に三八五のカルテルを算へ、しかもその中約二百は組織の高度なシンデケートの性質をもつてゐたといふ⁶⁾。この中煉瓦製造業の一三二が最も多いが、鐵鋼業の六二、化學工業の四六、纖維工業の三一、採石工業の二七、石炭業の一九等が之に次ぐ。一九一一年にはチールシュキーの計算によれば五五〇乃至六〇〇のカルテルが存在したといふ⁸⁾。かくの如くカルテルの數は激増を見たのであるが、之と同時にカルテルの組織も著しく完全なものとなつた。之を鐵鋼業及び炭鑛業について見るに、一八九〇年頃までは地方的な組織のルーズなカルテルがあつたが、カルテルの經驗が次第に豊富となるに従ひ地域別のカルテル間に提携が行はれ、鐵鋼及び石炭については極めて強力なものが成立したのである。殊に一八九三年設立せられたライン・ウエストファリア石炭シンデケートは組織の強固にして包括的な點で當時カルテルの代表的なものと目され、又之が鐵鋼業においても強力なるカルテルを成立せしめることとなり、一八九六年銑鐵カルテル *Rohisenverband*、一九〇四年製鋼業カルテル *Stahlwerksverband* が設立せられた。一八九五年より一九〇〇年に至る好況期の終り頃約一年餘、ライン・ウエストファリア石炭シンデケートを初め原料部門のカルテルが好景氣を利用して相當激しい價格鈎上を敢行したことは、遂に輿論の反對を招き、政府を動かしてカルテル取締の準備的調査を行はしめる

5) Pohl, L., Die Kartelle der gewerblichen Unternehmer, 1898.

6) Liefmann, Die Unternehmerverbände, S. 144.

7) Wiedenfeld, K., Gewerbepolitik, 1927, S. 113 による。

8) a. a. O.

9) 小島精一、前掲書、549-584頁。

に至つた¹⁰⁾ (Kontradiktorische Verhandlungen über deutschen Kartelle, Bd. I-5, 1903-1906; Denkschrift über das Kartellwesen, 1906-1908) 如き、又カルテルの勢力の強大となつた一證據である。かくして一九〇〇年前後は獨逸の重工業カルテルの發展において特に注目すべき時期である。

合同及びコンツェルンの發展も亦此の時期に於て著しいものがあつた。ハイマンの研究せる混合企業の隆盛はその一例である。之は技術的及び經濟的諸理由に基くものであるが、就中強力なるカルテルの統制がかかる發展を促したことも周知の如くである。ライン・ウエストファリア石炭シンデケート内において一八九四年加盟者は九八であつたが、其後新に五企業が加はつたに拘らず一九〇三年には八三に減少してゐる。即ちこの間に二十の企業が合併せられて獨立性を失つたのである。¹¹⁾ 又一八九三年頃には混合企業の數は未だ大なるものではなかつたが、一九一〇年には製鐵兼營の炭坑數一五、採掘量三三、四九四千トンにして全採掘量の四〇・九%を占めるに至つた。¹²⁾ かく混合企業が増加し、その發展が單純會社を壓迫するところより、石炭シンデケートの契約更改(一九〇三年)、鐵鋼業カルテルの成立(一九〇四年)は著しい困難を経験せねばならなかつた。

工業の集中が著しく進んだことが銀行をして之に無關心たり得ざるに至らしめたことは疑ひないが、然らば集中、特にカルテルの效果について銀行は如何なる考へをもつてゐたであらうか。カルテルが競争を排除する限り、加盟企業の收益を向上せしむるといふことは明かであり、銀行は第一にこの見地から工業の集中を背後より促進したのである。¹³⁾ 更に一步進んで、カルテルに恐

10) Muhs, K., Kartelle und Konjunkturbewegung, 1933, S. 15.

11) Wiedenfeld, K., Das Rheinisch-Westfälische Kohlensyndikat, 1912, S. 38.

12) Duschitzky, S., Das Konzernproblem, 1927, S. 116.

慌を緩和する作用を期待せりや否やについては明かではないが、當時の學者の説と同様、或る程度之を期待してゐたのではなからうか。シェーンランクはカルテルにより經濟の連續性が増大するとし（一八九〇年）、グルンツェルは一九〇一年の恐慌に於て之を緩和する作用を認め得るとなし（一九〇二年）、又フオーゲルシュタインも同様な作用を認めてゐる（一九〇三年）。フエルカーによれば、カルテル運動に關係ある人々は、カルテルには高景氣を緩漫にする作用があると共に、不況期には經濟生活の激動を少くとも或る程度防ぐことを得ると考へてゐたといふ。¹⁴⁾（一九〇三年）

要するに一九〇〇年前後は工業における集中が著しき發展を遂げ、殊に重工業においては混合企業の隆盛と強固なるカルテルの成立とが見られた。同時に銀行はかゝる現象に大なる關心を持ち、當時の不況期を之によつて切り抜けんと考へたやうである。銀行が工業の集中に積極的態度をとつたことは此の點からも了解し得るのである。

五、結 言

我々は以上においてヤイデルスの研究せる當時の獨逸工業の状態を概觀した。一八九〇——一九〇〇年前後の時期なるものは、一八八八——一九〇年の好況期に續く不況期（一八九四年迄）と六年に亙る大好況期（一八九五——一九〇〇年）と恐慌（一九〇二年）とを含む。一八九四年迄は獨逸經濟は長期的不況期にあり、その後は世界大戰まで長期的好況期と見られる。一般經濟状態はいはゞ轉換期でもあり、變動が甚だしかつた時であつた。工業、殊に炭鑛業、鐵鋼業及び電機工業の如き重工

13) Jeidels, a. a. O., S. 253.

14) Wolfers, A., Das Kartellproblem im Lichte der deutschen Kartellliteratur, 1931 (S. 110-111) による。

業は著しき發展の過程にあり、大なる資本需要について専ら銀行の力に頼らなければならなかつた。又工業の集中においては混合企業と主要カルテルの顯著な發展が一時期を劃してゐた。

銀行が工業の集中に對して追隨的態度を脱して積極的協力をなし、兩者が集中の發展について同様な重要さを持つに至つた、とヤイデルスが述べたのは恰も此の一九〇〇年前後からのことである。尤も、この傾向は一九〇五年、その研究の發表せられたる時には、未だ萌芽にして確たる原則とは見ることが得ないとしてゐる。

工業の集中は資本主義經濟當然の歸結であつて上述の時期に特有の現象ではない。故に銀行は數企業に融資してゐるか、又は融資が巨額である限り、工業の集中を促進する態度をとらざるを得ない。然しきりとて必ずしも銀行が工業の集中にイニシアテイヴをとるとは限らないのである。ヤイデルスの結論の一般化の前に考慮すべき一點があるのである。

蓋し他方において、銀行に比して工業の相對的地位が弱ければ、ために銀行の干涉が積極的となることは當然であるが、然し若し事情が之と異り、大戰後の獨逸の如く工業に比して銀行の相對的地位が弱くなれば、銀行の態度は消極的とならざるを得ない。兩者の勢力を決定する要素は上述の如く種々あるけれども、要するに銀行の資金内容と工業の資金調達方法、即ち資本市場の構成であらう。換言すれば工業が銀行資本より如何程獨立して行けるかが問題である。偶々一九〇〇年前後より世界大戰迄獨逸重工業は大銀行に強く依存してゐたところから上述のヤイデルスの觀察したる如き事實は生れて來たのである。